Love W

みねお涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｌｏｖｅ　Ｗ

【Ｎコード】
Ｎ７２２２Ｙ

【作者名】
みねお涼

【あらすじ】
トールには秘密があった。
彼氏として付き合っていくには、とても重大な秘密が。
トールの秘密を知るユキは、彼女として日々その秘密に振り回されることになるのだが…。

第1話（前書き）

少女漫画のノリで書いてます。
細かい描写がありませんので、ご了承ください。

第1話

午後の空気は、夕焼けの熱を孕んでまだ暑い。
秋の足音はすぐ後ろで足踏みしたまま、強い日光が大地の温度を上昇させる。
うだるような熱気は、コンクリートとアスファルト。
そしてエアコンの室外機のなせる技か。
そんな日差しの中、授業を終えた学生達が校門を後にする。
磨き上げられた校門の門柱は、丁度言い具合に公孫樹の日陰に入っていた。
一人の男子生徒が「第一高等学校」と名の刻まれた門に寄りかかって、ハードカバーの本に視線を落としている。
しばらくして、部活動生と受験を控えた3年生達を残す校舎内から、少女は駆け出してきた。
走り寄る少女が、声をかける。
「トール」
呼びかけられた少年は顔を上げ、かけていた眼鏡のブリッジを持ち上げた。
「おそいよユキちゃん」
言葉では少女を非難しながら、微笑で迎える。
2人は一緒に歩き出した。

堤ユキと井出トールのデートは決まって放課後。
自宅へ帰るまでの、20分たらず。
でも、それが毎日の楽しみだった。

楽しそうに談笑する2人の死角から、一台の自転車が近づいていた。

彼女達が、その危険に気付いた時には、既に回避できない状況で。
「危な…！」
自転車に気付いたトールは、咄嗟にユキをかばった。
しかし、カバンが自転車のハンドルにに引っ掛かり、トールの体を強く回転させた。
――ゴン！
横転し、学校の塀に強く頭を打ち付けてしまったようだ。
「トール！」
ユキは、しゃがみこんで声をかける。
身じろぎしないトールの様子を見て、自転車に乗っていた人が、救急車を呼ぼうと携帯を取り出すが。
「ごめんなさい！救急車…！」
直後、トールはむっくりと起きあがった。

「いらねぇよ、そんなん」

トールには、秘密があった。

「だっせぇ…」
トールはそう言い、手櫛で髪を書き上げる。
整髪料もつけていない、清潔な黒髪が乱れる。
その言葉遣いといい、雰囲気といい、直前までのトールであった人物は、何かが変わっていた。

「……ケイ？」

ユキは、恐る恐るトールのことをそう呼んだ。
ケイ、と。
「オレ、ちょっと行ってくるからこれよろしくね」
トール…いや、「ケイ」は、不敵に笑いながら手にしていた学生かばんをユキに放り投げた。
「ちょっ…、待ちなさいよ！」
歩き出そうとするケイに、ユキは強気に声をかける。
中身がトールでないのなら、ユキもそれなりの態度を取る。
振りかえり、じっとユキを見つめるケイ。
「僕を止めたかったら…」
睨み付けるユキに、ケイはにじり寄った。そして、顔を近づけてぼそりと。
「オレにキスしてよ」
そう挑発してやる。
ケイには、ユキとトールがまだ清い仲だと分かっている。
だから、そんなことを言われて顔を赤らめるユキを見るのが楽しい。

「…」
無言のユキと自転車の人に背を向け、ケイは歩き出した。

秘密。
トールは、二重人格なのだ。

【Ｌｏｖｅ　Ｗ】

ユキは、茫然と自分の前から消えるケイを見つめていた。
自転車の持ち主も、わけがわからず中途半端な位置に携帯電話を掲げたまま。

トールが意識を失うと、ケイは表に出てくる。
品行方正、成績優秀なトールに対し、乱暴暴虐、天真爛漫なケイという人格が生まれたのは、必然なのか…

なんにせよ。
この事態は、付き合い始めた頃から事情を知るユキにとって大きな心配の種であった。

‥‥
外にはもう、人工の明かりしか灯っていない時間。
ユキは、机に向かい勉強していた。
――コン。…コン。
窓に、何かが当たる音。2階の自室のカーテンを開くと、一人の若者が道路に立ってにっこり微笑んでいる。
（トール？）
まさかと思い、ユキは窓を開ける。
「おい、オレの荷物は？」
（…なわけないよね）
その言葉遣いから、男の意識ががトールでないと悟りがくっときた。
そんなユキを無視し、ケイは勝手に部屋に入ってくる。
器用にも、雨どいをつたってである。
「あんたのじゃないでしょ？ちょと！ってゆうか入らないでよ」
「気にするナって！あー疲れた」
ベッドに倒れこむケイ。その傷だらけの体を見て、

「もう！またケンカなの！？」
ユキは呆れた様に、しかしきちんと声をひそめて注意する。
一人娘の部屋に、意図も簡単に男が侵入しているなどと知られてはまずい。
だが、ケイの反応は返ってこない。しんとする室内。
ケイは、静かに寝息を立てていた。
「…もう寝てる。…ん？」
大きく肩を上下させたユキは、見つけてしまった。
ケイのシャツがはだけている。その下にある、大きな傷痕を。
（まさか、ケイ…。危ない事してないよね？）
その傷は、ケイの下腹部を右下から左の肋骨の下までを大きく横断していた。
傷自体はだいぶ古いもののようだ。
（そう言えば、水泳の授業…出てないけど、コレのせい？）
もちろん清い仲の二人である。
ユキが、ケイの…トールの体に刻まれたその傷を見たのは、初めてのことだった。

第2話（前書き）

少女漫画のノリで書いてます

第2話

「ごめん！ユキちゃん！」
深夜に目覚めたトールはとりあえず帰宅した。
学校で再び対面すると、彼は両手を合わせてユキに謝った。
教室の一角。ユキは自分の席に座って笑っていた。
「いいよー。でもお母さんに見つからなくてよかった」
「ほんっとーにごめん！ケイ（あいつ）何かした？」
腰を曲げた姿勢のまま、不安げに顔を上げる。
「大丈夫だよ。すぐ寝ちゃったし」
ケイでいる間の記憶は、トールには無いらしい。
トールの質問にユキは、昨日の「キスしてよ」の発言を思い出す。
（トールもちょっとくらいしてくれていいんだけどなぁ）
そんなことを思いながら。

昼休み。
「もう一個くらい買ってもよかったかなー？」
ツバサは、上機嫌で1階の渡り廊下を歩いていた。手にはパックの紅茶と、いくつものパンを抱えている。
まだ3時間目の休み時間。この時間、購買部で買い物することは禁止されている。
ツバサは教師に見つからない様に、人通りの少ない裏手の廊下を歩いていた。

ふと、裏門のほうに人影を見つけた。
（あれ…？井出君、と…？）
それは、友人ユキの彼氏として認識している男子生徒、井出トールだ。
「すみません」

「いや、いいんだけどさ、たまには診せにきてよ」
そして、もう一人。
鉄製の黒い門に背をもたげて話す背の高い男性。
トールは、門に手をかけ俯いていた。
「じゃ、明日、祝日。絶対来い？」
「……」
なにも言わないトールを一瞥して、去っていく男性。
その男をツバサは知らない。
裏門でひっそり会わなければならないほど、やましい関係なのか。
聞こえてきた短い会話からは、何の手がかりも見つけられなかった。
ツバサは、遠くで「？」を飛ばすしかなかった。

放課後の教室。
「ねぇユキちゃん、明日デートしよう？」
「え？何どうしたの。珍しい」
いきなりの申し出に、きょとんとなるユキに、トールは
「…だめ？」
上目遣いに、子供のようにしゅんとした。
そんなトールに、ユキはきゅんとなってしまう。
我ながら、ばかだなと思ってしまうが、そんな彼の仕草が愛しい。
「ううん。だめじゃないよー。うれしい！」
大体、トールの方から誘ってくること自体珍しいのだ。
ユキに、断わる理由は無かった。

久しぶりのデートに、二人は近くのアミューズメントパークを選んだ。
入場料さえ払えば、中の乗り物は乗りたい放題。

思いっきり楽しむには、ここが一番だと思えた。
そんな2人を、何人かの男達がひそかにつけ回している事に、当の本人たちは気づいていない。
園内に設けられたゲームセンターで、ＵＦＯキャッチャーに打ち込む二人に、彼らは近づいた。
「おい！」
声をかけられると同時に、トールは肩をつかまれた。
強引に振りかえらされ、いきなり腹を蹴り上げられる。
「きゃあぁ！」
「この前はお世話になっちゃって？どーも」
トールは苦しそうに顔をしかめて、ケホケホと息を吐く。
別の男に足で再び蹴りこまれて、地面にうずくまる。
意識を失いそうになるが、トールは頭を振って自分を保とうとした。
「っ、この前の勢いはどうしたぁ？」
「きれいな彼女連れちゃってさ。もったいねぇよオマエには！」
絡んできた男達は、皆ユキ達と同年代のようだ。
男達は、ユキに手をかけた。
「やだっ、放してよ！」
トールがこんな乱暴な男達と知り合いなワケは無い。
ユキは、すぐにケイが関係していると分かった。
トールがいくら男で意地があっても、彼らには敵いっこない。
「トール！ケイを…！ケイを出して！」
ユキはケイに助けを求めた。
（トールが怪我しちゃう！）

その声に、トールは一瞬静止した。

ふらりと一瞬上体が揺れたかと思うと、相手に殴りかかる。
ねじりこむ様に繰出された一発。殴られたほうの男は気絶していた。
睨みつけたトールの目に、何かそれまでと異なる脅威を感じる。

それを見た残りの男たちは、怯んで逃げていった。
「ケイ！」
「……」
安心しきったユキの態度に、呼びかけられた方は何も答えない。
「…ケイ？」
不安になってケイの顔を覗き込もうと、そっと腕に手を伸ばす。
「ユキちゃん。しばらく僕に近づかないで…」
ケイのの腕に振れる前に、ユキの手がびくりと震えた。
「まさか、トール？…なんで――――！？」
ケイだとばかり思っていたユキは、衝撃を隠せなかった。
それが、裏切りだったとはしばらく気付かなかったほどに。
「ごめん、僕、先に帰るね」
ユキは、また彼の後姿を見つめることしか出来なかった。

第3話

「どうしよう…。トール怒らせちゃった」
祝日が明け、学校に出てきてもユキの心は晴れない。
一晩経って晴れている様な、簡単な悩みではない。
「あぁ？どうしたのさ、ユキっち」
自分の机に突っ伏して唸る友人に、ツバサが声をかけた。
ユキは、事の一部始終をツバサに相談した。
井出トールが、二重人格で、ケイがどんな奴なのかは伏せて。
「ってそりゃ、品行方正な彼がいきなり暴力振るっちゃったらねー。反省してんじゃない？」
泣きそうな顔をしているユキに、ツバサは平然と言い捨てる。
持参しているお菓子を食べながら、ツバサは続ける。
「ユキの、本当の気持ちをぶつけたら？」
それは、ユキから話しかけなさいということだ。
こくんと小さくうなずくユキ。
一人で悶々としていたが、人に話せたことで身が軽くなった気がした。
「そういえばさ、あたし井出君と若い男の人が話しているの見たんだけどさ、何だったんだろうね？」
「若い…男？」
ユキは怪訝そうに表情を曇らせた。
またケイが起こした事件に関連してのことだろうかと心配になったが、ツバサの話ではそういう雰囲気ではなかったという。
「明日、みせにこいとかなんとか…。でもユキっちとデートしてたってことは、サボったのかもね」
「誰かな…？」
「さぁね。でも男前だったよ？」

今日、トールは学校に姿を見せなかった。

（何か、あったの…？）

一人でとぼとぼと校門を出てきたユキに、若い男が声をかけた。
「なぁ、あんた堤サン？」
偉そうに腕を組んだ男を、ユキは半ば放心状態で見上げた。
男は、いつもトールがそうしているように、校門に背を預けて公孫樹の影にたたずんでいた。
その印象は若い。恐らく２０も半ばを超えたくらいではなかろうか。
「オレは御坂リョウジ。近代稀にみる天才医師です」
男はそう名乗って、怪しい笑みを口元に浮かべた。
というか、全体的に怪しい。
自分で自分を天才とか紹介している時点で。
本当に医師だとしても、信用半減どころが無いに等しい。
というか、俄かに信用しがたい。
「ちょっといいかな？」
「……」
ユキは早足に歩き出した。怪しすぎる。
その後を、長いリーチを持つリョウジは難なくついて来ていた。
「一体何なんですか？」
「堤に話たいことあるんだけど」
ユキは、自分の名が堤だと肯定した覚えは無い。なのに、この男はすでにそうだと決め付けていた。
まぁ、間違ってはいない。しかも
「堤は、井出の彼女なんだって？」
そんな情報まで知っているとは…
「！なんで…。あ、あなたもしかして、学校でトールと会ってたっ

て言う人！？」
「あれ？見られてたんだ。まぁ、いいんだけど、そんな話をしたいわけじゃなくてさ」
立ち止まったユキを、今度はリョウジが先導する。
どうやら、ユキの行き先と同じ方へ向かっている。
トールの家の方角へ。
ユキは、リョウジを睨み付けながらもついて行く。
「あいつの腹にでっかい傷があるの知ってる？あれ手術したのオレの親父なんだけど、親父が死んでからはこのオレが診てやっている」
一昨日の夜、初めて見た傷のことだと、ユキは瞬時に判断した。
「それが、昨日の診察の約束やぶってね、夕方来たと思えば傷に爪立てて、しかもいきなり倒れやがった」
「それ、ケイ…が負った傷なんですか？」
ユキはリョウジを警戒しながらも、そう訊かずにはいられなかった。
あの傷のことは、知っておきたい。
「…んー、やっぱ知ってるのか。もう一人の人格のこと」
この医者は、トールとケイの二重人格の事を知っていた。
ごくり、と。
ユキはつばをのむ。
リョウジは、あごに手をやりしばらく考えているようだった。
何を聞かされるのか、ドキドキしながら待つ。

「あの傷は、双子として生まれてくるはずだったモノを取った痕さ」

「双子…？」
「連結胎児って言えば分かるかな？本来別個の胎児が、なんらかの要因で腹のところでくっついてたそうだ」
あっけらかんと。
リョウジは、ジーンズのポケットに手を入れた姿勢で世間話のような感覚だ。

「しかし、心臓をはじめとするほとんどの臓器を共有していたのさ。だから、一人を助けるためには、もう一人の体を切り離さなきゃなんなかった」
残暑のせいでもなく、ユキの首筋を一筋の汗が流れた。
「二人同時には生きられない。そして一人が生き残った。井出、がね」
ちょうどリョウジの話が終わったとき、二人の行く先に、井出と表札の出ている家が見えてきた。
「じゃ、もしかしてケイという人格は、その双子の片割れ…」
目を泳がせながら、ユキは憶測でしかない考えを言う。
そんな大事件、大手術がされたのなら、ニュースになっていてもおかしくはない。
だが、そんな事実、今まで知りもしなかったし、きっと誰も知らない。
半信半疑に、リュウジの話を聞く。
「切断手術が行われたのは幼児の頃だ。意識なんて無いに等しい。だが…」
その手術には、危険と、気の遠くなるような時間が付きまとった。
井出の両親は、子供がいなくなる危険性より、どちらかが生き残る奇跡を信じた。
本来ならば、完全な双子として生まれてくるはずだった胎児。
それが、神のいたずらか悪魔の手引きか…。
連結して、しかも殆どの臓器を共有して生まれた命ゆえに、切り取られた胎児。
「確かに、井出はその存在を感じて感じてたんだろうなぁ」
玄関の前。
リョウジは、立ち止まって話を続けていた。
「だがな、だからといって井出の中に片割れの人格が残ると言うことは無い」
ユキは、トールの部屋を見上げていた。

自称天才医師の言葉が、体を通り抜けていく…。
どんなに考えをめぐらしても、それは憶測でしかない。
二重人格の形成には、いろんな原因が考えられている。

「オレは、ケイ（あれ）は井出の願望だと思っている」

玄関の前に一人立っているユキ。
頭の中には、リョウジの言葉が反芻している。
――井出の願望だと思っている。
リョウジは、トールの過去を伝えるだけ伝えると
『井出の傍にいてやりな』
と意味深な笑いを残し去って行った。
ユキは、言いようのない不安を抱えたまま、呼び鈴に手を伸ばす。

コール。

ドアノブが回り、金属質の扉が開く。
出てきたのは、ユキもよく知った顔の青年。
だが、一体どちらなのかは判断がつかない。
「あ、あの…ケガは…」
「入れば？」
言葉を発したのがトールではないことを悟り、ユキは安心したようにため息を吐く。

――ユキの本当の気持ちをぶつけなよ。

ユキの脳裏には、ツバサの声が浮かんでいた。
（謝りたい。…トールに…）

ユキは、トールの部屋に通された。そこは、ケイの部屋とも言える。
ケイは奥の椅子に、ユキはきちんと整頓されたベッドに腰掛ける。
「何しに来たの？」
ケイは無表情に訊いた。
「え、いや、なんと言うか…」
ケイは、しどろもどろした返事にいらつくでもなく、淡々としゃべる。
「近づくなって言われなかったっけ？」
「それはトールがっ…」
言い終わらないうちに、ユキの視界は傾く。
（――…えぇっ？）
「わかってねぇだろ…お前」
ユキは、しっかりと肩を押さえられて、ベッドに押し倒されていた。
前髪で、その表情は見えないが、ケイはなぜか苦しそうに言葉を続ける。
「ユキ…」
「……」
ユキはびっくりしたような表情のまま。
されるがままにキスされていた。

第４話

「ユキ、お前なんで逃げないわけ？ねぇ」
「…ケイ？」
唇が離れても、やはりケイの顔は曇っている。
普段とは違うケイの様子に、ユキはそっとケイの頬を包み込んだ。
その瞬間、ケイは弾かれた様にユキを解放し、椅子を蹴りつける。
「お前…！お前は！…トールが大事なんだろ！」
ユキは、ケイの叫びに愕然となってしまう。
トールに謝りたくて、来たはずなのに。
ケイにキスされて、ケイの苦しそうな表情を見て、慰めてあげたくなった。
あの自称天才医師の話を聞いてしまった後だったから…？
ユキは荷物を持って部屋を駆け出していた。

玄関を出たところで、ユキの目から一筋涙がこぼれた。

部屋では、ケイがベッドに頭を預けて意識を沈めていた。
「……ユキはオレでもいいみたいだな。取ってもいい？」
「…だめに決まってるだろ」
昨日のアミューズメントパークでの一件以来、閉じこもって出てこない「トール」と話をするため。

「はぁ？てめぇ、逃げてんじゃねぇか。言える口かよ」
「…」
「ユキも真面目なお前よりも、オレみたいな奴が好きなんだぜ？」
「ユキちゃんを愚弄するな！誰がお前みたいな……」
言いきらないうちに、「トール」の言葉はさえぎられる。
「オレを望んだのはてめぇだろうが！」
ぐっと、「トール」は黙り込んだ。
長い沈黙を破ったのは

「……どちらが好きかなんて、ユキちゃんが決めることだよ…」

トールだった。

そして、今日も一日が始まる。
ユキとトールの、そしてケイの葛藤は、日が変わったからと言って解決されない。
「ユキっち～。今日井出君出てきてるみたいよ？」
「え、ホント？」
ツバサの報せに、ユキはためらいがちな反応を示した。
その行為で、ツバサはユキがトールと仲直りできていないことを見破った。
「裏庭に一人でいたけど、なんだかワイルドなカンジでカッコよかった！」
どうやら、また密かに購買部に買い物に行ったらしい。
ツバサがあの渡り廊下を使うのは、そんな時だけだ。
「ケイなんだわ！」
ユキは、駆け足で教室を後にする。
ケイとも気まずい雰囲気には変わりない。
だが、トールを裏切るような行為をしたと気付いてしまったからか、幾分ケイの方が気が楽だ。

「え？ケイって、誰？何？ちょっと！」
後ろでツバサがなにか叫んでいるのも、もう耳に入らない。
渡り廊下まで出て、目的の人物をみつけた。
「ケイ！」
ケイはゆっくりと、走り寄るユキのほうへと振りかえった。
「あの、昨日本当はわたし…」
ケイは、息を切らしてそう切り出すユキの腕を引き、抱きしめた。
「ちょと…」
恥ずかしそうに身をよじるユキだったが、強いてその腕を振り払うようなことはしなかった。
「ねぇ、ユキ。拒まないでくれるって事は、オレを選んでくれるわけ？」
「……え」
言葉の意味がわからず、ユキは固まった。
「約束したんだよ、トールと。ユキが、選んだほうがこちら側にいるって」
重たい雰囲気に、ユキは恐れを覚える。
得体の知れない、恐れを。
「どういうことなの…？何？こちら側って何なの？」
妙な不安感を覚え、ケイから離れようと腕に力をこめるが、ケイはしっかりと抱きしめたままユキを放そうとしない。
「トールが、苦しむんだ。ユキを、守る自身をなくして」
「ユキちゃんの、選んだほうだけがこの現実で生きていくから…」
「なぁ、オレと、トールとどっちが大事？」
「選んで。どちらか、一人を」
ケイとトール。
一つの体に宿る、違う人格。
二人に語りかけれらている感覚。
彼らが、求めるモノはただ一つ……。

ユキの目に、いつの間にか涙が浮かんでいた。

（わたし、本当にトールが好き…、だけど、ケイも…好き）
トールとの思い出、ケイとの思い出が、ぐるぐるとユキを取り囲んでいく。
（どちらかを、選ばなければならないの？）

――かつて、生き残るために片方が犠牲になった様に…

「違う！違うよ…！二人とも！」
ユキのその言葉に、ケイはユキを放してやる。
見つめ合う二人。
「どっちも、おんなじ人なんだよ？」
一呼吸おいて
「欲張りでもなんでもいい！どっちも大切なんだから！」
笑顔で言いきるユキに、面食らったかのような顔をしているのはケイか、トールか。
ユキの顔に、迷いは無い。
「は、ははは…」
力なく笑うその様子に、ユキは泣いているのではないかと錯覚する。
「まいるなぁ…。はは、どっちもかよ…」
そう言いへたれこんだのは、ケイだった。
「うん。選べって言われても、選べないくらい大切。こんな答えがあっても良いでしょ？」
ケイは、今までにないくらいの笑顔をユキに、そして内にいる「トール」に向ける。
「自身もてよな？…トール（オレ）」

その消え入りそうな声を、ユキははっきりと聞き取ることはできなかった。
「……ケイ？」
不安が、
「……あーあ、すっごい髪型」
笑みの含まれた、声。
ワックスで整髪された髪の毛を、きちきちといつもどおりに戻していく。
その性格は、トールのもの。
だが、その途中で何を思ったか、注意を受けない程度に軽くスタイリングしていく。
「……トー…ル？…なの？」
「どうだろう…？」
顔を上げた青年は、やわらかで穏やかな目をしていた。
「ありがとう…。僕も、ケイも選んでくれて、ユキ…」
「！！」
ユキはその場で思いっきりトールに抱きついた。
はじめは躊躇していたトールも、しっかりとユキの体に腕を回した。
もう決して、大切な片割れをなくさない様に。

秋の陽気に、公孫樹の実が熟し始めていった。
これから、葉も一層色づいてくるだろう。
その大木の恵みは、何も実や秋の彩りばかりではない。
直射日光を遮って、大きな日陰を生み出している。
そこは、気温が少し低かった。
青年が、ハードカバーの厚い本を読んでいる。
手に持つのも重そうな、だがはっきりと学童向けと分かる大き目の文字。
数年前からブレイク中のファンタジー小説だ。

少女が、後ろの校舎から走ってやってきた。
いつも青年より早く待ち合わせ場所の校門に来ようと心がけているにも関わらず、ついぞ達成できた日はない。
「ごめんトール！」
青年、トールは本を読む時だけにかける眼鏡をとり、笑顔をむけた。
今日は、トールの家の近所にある大病院の跡取息子、自称天才医師、御坂リョウジの診察を受けに行く予定だ。
今はまだ研修医だが、いずれ医院長になること間違い無しの腕と認められているらしい。
それにしてもユキはまだ彼の話を、人格を信用できない。
でも。

「行こうか、ユキ」

差し伸べられた手を握り、ユキはうなづいた。
トールでも、ケイでも。
どっちも大切だという気持ちに偽りなどないから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7222y/

Love W

2011年11月28日04時46分発行